

慶應義塾大学湘南藤沢学会
2009年度 シンポジウム・研究ネットワーク基金 成果報告
講演会・意見交換会

「子どもを虐待から救うために～性的虐待に焦点をあてて～」

高城智圭（慶應義塾大学看護医療学部）

1 実施目的

私たちのプロジェクトでは、子どもの虐待予防についての事例検討を約1年半の間、市の保健師と一緒にやってきた。その中で性的虐待を疑われるケースについて保健師と他機関の担当者の認識にずれが生じ支援が遅れるということがあり、このような認識のずれの背景には性的虐待は日本人では起こっているはずがない、対応が難しいので認めたくないといった気持ちが働いているのではないかと考えられた。そこで、本研究会では、性的虐待発生を速やかに察知し支援の土壌にのせるために、子どもの支援にあたる児童相談所職員、保育所職員、保健師等を対象に、性的虐待の子どもの発達への影響、また支援方策について、多くの方の理解を得ることを目的に講演会と意見交換を実施した。また、この研究会を機に虐待についての支援のネットワークが広がることを期待した。

2 実施方法

広報活動：講演会・意見交換会についてちらしを作成し、浜松市保健福祉センター、浜松市児童福祉関係部署、静岡県健康福祉センター（保健所）、静岡県内市町保健センター、静岡県内看護系大学、慶應義塾大学看護医療学部、藤沢市、浜松市内医療機関などに9月初旬に配布。

実施場所：アクトシティ浜松 研修交流センター 401会議室

日時： 講演会 10月2日（金） 15時～16時30分

意見交換会 10月2日（金）16時45分～19時

主催： 保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための方策に関する研究会

3 講演会・意見交換会内容

講師は1990年代から子どもの性的虐待について関心をよせ、1994年には「子ども性的虐待」「子どもの性的虐待～その理解と対応を求めて」を著し、その後は性的虐待のザバイバーの方たちの支援を行っている北山秋雄氏（長野看護大学・教授）にお願いした。講演内容は性的虐待の状況は、女子が8割、男子が2割でほとんどが顔見知りの人からであり、子どもの年齢としては5～7歳、10～12歳の2峰性で、虐待期間は1年から3年という説明があった。被虐待児の特徴は、低い自己価値観、自責感、見捨てられ感があり自分を守るスキルを持たないこと、また症状としてはおびえ、しがみつきの夜尿、ひきこもり、睡眠障害がおこったり、性的言動が多くなるということであった。性的虐待を発見する手がかりのチェックリストも示され、虐待を受けている可能性の高い行動について説明

があった。

また被虐待児の問題行動の一つとして、自分との解離がおこったり、虐待経験を意味づけ逃れるための適応手段として被害者体験を繰り返すことがあるという説明があった。サイバーの人々であっても、自尊感情が低く、本当の意味での人間同士の関係を結びづらい傾向があるということが話された。性的虐待を受けた児童の家族の再統合はないということであった。

意見交換会の参加者は実際に性的虐待を担当した経験者が多く、具体的な1事例について検討した。、事例の被虐待児のIQが低いのは2年以上にわたって虐待を受けたために起きた可能性があること、被虐待児は親族に引き取られているが父親が接触をもつ可能性が高いので、接触を阻止する必要性について話された。他の参加者からの被虐待児等への具体的な対応についての質問にも北山氏が回答した。

4 参加者・講演会アンケート結果

1) 参加者

講演会の一般参加者は浜松市内・静岡県内の保健師、心理職、看護師等の30名で、研究会メンバーからの参加は7名で合計37名であった。

意見交換会の参加者は、一般参加者10名、研究会メンバー6名で合計16名であった。

2) 講演会アンケート結果

一般参加者に講演会でアンケートを配布した。回答が得られたのは15名(回答率50%)であった。

参加動機は「テーマに興味があったから」が12名であり、「仕事に役立つ」は11名であった。また、「テーマをさらに深めたいか」では「はい」が12名であった。感想としては「具体的な内容を知ることができよかった」「子どものだすサインをみのがさないようにしたい」「もっと性的虐待に関心が寄せられるとよい」「沈黙してしまう社会構造をどう変えていったらよいのだろう」「子どもへの支援の不十分さを感じた」ということであった。

5 まとめ

広報期間が1ヶ月より短かったにもかかわらず、30名の参加者あったことは潜在した性的虐待への学習ニーズがあると考えられた。アンケート結果では「さらにテーマについて関心を深めたい」という回答が多かったことから、性的虐待に焦点をあて専門家の講演と言う学習機会を提供したことは意義があったと思う。

意見交換では、支援経験者が多く参加していたが、性的虐待児への対応方法についての事例検討を行う機会はほとんどなく、支援を手探りでを行っている状況なので支援のヒントを得たという声が多く聞かれた。また、今後もこのような相互の学習機会が得られるとよいということであった。今後、性的虐待の支援についてのネットワークの在り方については研究会でさらに検討していきたい。